

パヤオの曳縄漁法技術交流会

1. 課 題

パヤオ曳縄漁法技術交流

2. 目 的

本県において宮古地域ではパヤオ（浮魚礁）が設置され、カツオ類・マグロ類等の回遊性魚類を対象にした漁法が発達し、それらの漁獲量が増加している。そこで当地域のパヤオ曳縄漁法の技術交流を行い、各地域の漁業者間の親睦を深めるとともにそれぞれの地域におけるパヤオの有効利用を図ることを目的とする。

3. 場 所

伊良部町漁業協同組合

4. 日 程

昭和59年10月23日～昭和59年10月25日

5. 参 加 者

氏 名	所 属	備 考
村上一男	那覇市沿岸漁業協同組合	オブザーバー
登川真徳	名護漁業協同組合	
金城信雄	伊江漁業協同組合	
玉城正武	那覇市水産係	
長嶺 巖	宮古支庁水産業改良普及員	
下地 驍	宮古支庁水産業改良普及員	
佐多忠夫	沖縄県漁業者センター	

6. 交流地の概要

伊良部町は、沖縄本島から南西へ約 320 km の宮古諸島にあり、伊良部島と下地島から成る 2 島 1 町の離島であり、人口がおおよそ 9,500 人の町である。両島の間には、長さ約 3.5 km、幅約 100 m の入江水道域があり、ミナミクロダいの養殖が行なわれている。

島の周辺は広大なサンゴ礁が発達し、好漁場に恵まれ、沿岸かつお漁業・追い込み漁業・曳縄漁業が営まれる。一方、パプアニューギニア・ソロモン諸島等を基地とした南方基地かつお一本釣漁業が盛んな漁業地域である。

7. パヤオ（浮魚礁）について

パヤオとはフィリピン由来の名称で、魚が流れ木に群がるという性質を利用したもので、海上に「流木」に相当する工作物（竹・プラスチック等）を浮べ、流れないようにアンカーロープで係留したものである。宮古地区においては、昭和57年にパヤオを設置したところカツオ類・マグロ類・サワラ類・シイラ類等の漁獲があり、蜆集効果のあることがわかった。また試験的にパヤ

オを水深100～1,200 mにいくつか設置したところ、浅い所よりも深い所の方が効果があったので、以後水深800 m以深に設置するようになった。1図にパヤオの設置位置を示す。

8. パヤオ設置場所の選定条件

- a 水深は800 m以深
- b 底質は岩礁地帯を避け、砂または砂レキ地帯であること
- c 潮流の激しくないところ（通称「潮だまり」）
- d ソネ付近で鳥山（カツオ鳥等が群がっている状態）がよくみられるところ
- e 小型船でも操業可能なところ
- f 貨客船の往来の激しくないところ

9. 漁 法

a つり漁法

操業方法を2図に示す。パヤオの潮上約1マイルから漁具を仕掛、船を流す。船が流されてパヤオから遠のくと再びパヤオの潮上まで戻す。餌はムロアジ、イワシ等の生餌または冷凍キビナゴを使用している。

b ジャンボ曳縄漁法

操業方法を3図に示す。船の中央部に立てた竿（FRP約10m——船の長さのおよそ1.5倍）から幹糸を出し、その幹糸には数本の枝糸をつけ、枝糸の先には擬餌針（イカ）を水面に垂下させ、幹糸の先には長さ80～100 cm、巾10 cmの角材の前後部に翼をつけた漁具を曳く。前部と後部の翼の向きは逆にする。船速5～7ノットで曳く。幹糸と枝糸の結索は金具を使用せず、各々輪を作り結合させる。釣針は二本針を使うと、片針に魚が掛った場合その針がのびることがあるので一本針を使用する。マグロ類はとんでいるイカを好む習性があるので、擬餌は水面から一尺ほど上をはねるようにする。

10. パヤオの導入効果

- a 漁場（魚群）探索の時間が省かれ、就業時間が短縮され、燃費が節約される。
 - b 漁獲効率が良くなり、漁獲量が増えた。
 - c 漁場が限られているため集団操業が可能になり、研究グループが結成され、漁具漁法等の研究、改良などがされるようになった。
- 従って、若者の漁業に対する就労意欲がでてきた。

11. 操業実習

三隻の漁船に分乗してパヤオ周辺で操業したが、その日は荒天で十分な操業はできなかったがカツオ類・マグロ類・サワラ類・シイラ等が漁獲された。交流会参加の漁業者は流し釣・ジャンボ曳縄漁法の操業方法が理解できたので、それぞれの漁協へ帰ってからそれらの漁法の操業試験を行なってみたいとのことであった。